



オオカミ谷からのぼり出る道まで来て、ママシのことを思い出した。ベティが先に来て待っていた。身の毛がよだち、そこで死んだオオカミたちと思いがつなげたような気がしてきた。ベティはギンガムチェックのワンピースと、自分の青い目と同じ色のセーターを着て、黒い革靴くわをはいている。金色の髪かみはポニーテール。とても悪さをしそうには見えないだろう、顔の表情さえなければ。

わたしは、ベティの三メートルほど手前で足を止めた。

「ベティ」声をかけながら、右向きにはさんでいた本を、よりきつくはさむ。かなり重いから、もしベティがわたしに近よりすぎたら、投げつけようと思ったのだ。何も武器がないと思われたくなくて、左手の弁当入れも少し振ふった。

「アナベルなんて、いったい、どういう名前？」ベティの声は低くて男子みたいだ。わたしを